

2024(令和6)年度 聖隷クリストファー小学校学校評価書

- 目指す学校像 キリスト教精神の隣人愛を基に、日本文化を理解した上で、グローバル社会に貢献できる児童の育成を目指す。
- 育てたい児童像
  - ① 奉仕活動（サービス・ラーニング）や学校活動を通して、他人を思いやる心や行動を養う。
  - ② 一人ひとりの児童にとって、主体的・能動的な学習が成り立つ力を養う。
  - ③ 身の回りの現象を題材にしながら、教科の枠をこえた探究学習で、探究力、思考力、コミュニケーション力や表現力を養う。
  - ④ 母語を重視（概念や意味の構築）した上で英語イマージョン教育を行うことによって、二言語習得を目指し、多様な見方や場に応じた思考・判断ができる人材を育てる。
  - ⑤ 主体的に学んでいく力や自信をもって挑戦していく自己効力感の高い人材を育てる。

評価：A十分に成果があった B成果があった C少し成果があった D成果がなかった

項目	取組内容	評価指標	自己評価		学校関係者評価	
			評価	評価の理由	評価	評価の理由
建学の精神	建学の精神・教育理念を理解するための教員研修実施	①教員研修を実施（年3回）	A	校長・聖書科教員等によって教育理念や聖書の価値観を共有する場が設けられている。	A	建学の精神の理解のための取り組みが進んでいる。
		②本学の教育理念を基にして、「BIBLE」・礼拝・キリスト教行事と探究プログラム(POI: Program of Inquiry)を関連づけながら、カリキュラム作成・活動を宗教部を中心に計画・実施する。	A	スタッフミーティングにおいて毎月、児童と共有する聖書箇所について聖書科教員が解説をしている。・探究学習の単元(UOI:Unit of Inquiry)においても建学の精神と関連させるように各教員が意識を持ち始めている。	A	聖書科教員を中心に充実が図られている。
探究的な学び（国際バカロレアPYPプログラム）	国際バカロレア初等教育プログラム（PYP:）の認定校として学校全体としてプログラムの運用が図られるようにする。	探究プログラム（POI）における概念的な探究について、教師全員が理解を深め、各学年で教科別・教科横断的な指導計画を作成し、個別最適化の授業を展開する。	B	学校は、認定を受けた後、当然のようにPYP(Primary Years Programme)の個別化に着手している。このプロセスにはかなりの時間がかかるが、2029年のIB訪問までにプログラムをより強固なものにしていきたい。	B	スチューデントカンファレンス(学習発表)の様子から、児童が探究的な学びを深めている様子が確認できた。
英語イマージョン	英語イマージョン教育の充実を図り児童の英語能力を向上させる	英語イマージョン教育の成果を図るため、今年度は3～6年生にオーストラリア研究評議会のISA(International School's Assesment)4技能検査を実施し、評価をもとに今後の指導に反映していく。	C	新英語プログラムの実施が限定的であったため、ISAテストは次年度まで延期することに決定した。新英語プログラムを実施するために、教員にはより多くの教員研修（PD）とサポートが提供される予定である。	C	英語イマージョン教育について、計画を着実に進めることでさらなる成果を期待する。
児童理解	個々の特性に合わせた指導、支援ができるための体制を構築し、それぞれの児童の理解と適切な学習環境や方法を考え、実践する。	①発達支援コーディネーターと担任との情報交換会を定期的実施する。	A	必要に応じて情報交換会が行われた。さらに計画的に時間を設定し支援を充実させたい。	A	計画どおり進めることができた。
		②児童の実態に応じて支援員を適正に配置する。	A	支援が必要な児童の特性に応じて、支援員を配置することができた。	A	計画どおり進めることができた。
		③クリストファー大学の発達支援の専門家やカウンセラーからの指導や助言を学習環境の改善に繋げていく。	B	カウンセラーからの指導や助言は役立だてることができたが、大学の専門家との連携が今後の課題である。	B	大学との連携により更に充実させることが期待される。
		④カウンセラー・該当児童の担任・養護教諭・発達支援コーディネータで必要に応じて会議を開く。	A	毎週月曜日の放課後、フィードバックの時間を設定し児童理解や指導に活かした。	A	計画どおり進めることができた。
児童募集	効果的な広報の方法及び計画的・実質的な募集計画を考え確実に実施する。	①クリストファーこども園、ターゲット園での説明会を実施する。 ②英会話スクール出張授業を実施する。 ③授業見学会を実施する。 ④海外進出企業の対応窓口等に対して広報を行う。	C	①～④の施策を計画的に実施、トークカフェ、オープンスクール、学校説明会・体験授業と結び付けて広報活動を展開した。昨年度より入学予定者増に繋げることができたが、定員確保には至っていない。本校の特長である英語イマージョン教育や探究型の学びについて、計画的により幅広く広報していく。	B	定員確保には至っていないが、一連の募集活動により、前年より入学予定者増に繋がっていると評価する。引き続き、本校の魅力を積極的に発信していくことが重要である。
保護者との協力	SCESPA(保護者会)が順調に活動していけるよう役員会と連絡調整を密にとり連携を強化する。 ・研修会への参加を促す。 ・以下のワーキンググループの活動を支援する。 ①スポーツフェスティバル委員会 ②防災防犯安全 ③お手伝いボランティア	以下の項目に関して学校が保護者と協力して進めていく。 ①スポーツフェスティバルを学校が保護者と協力して創り上げていく。	A	スポーツフェスティバルを学校・保護者が協力してつくりあげることができた。	A	初めての取り組みであったが保護者と協力して活動が展開されている。
		②SCESPA主催の学習会や行事に積極的に関わっていく。	B	学習会も行事も軌道に乗り積極的に活動が展開され協力し合うことができた。	B	保護者と協力して活動が展開されている。
		③ワーキンググループ（WG）活動を学校全体で支援する。	B	WGの活動が継続的または新規に計画・実施された。学校と保護者会が協力し合って活動できた。	B	保護者と協力して活動が展開されている。
学校安全	①新校舎建築期間の安全性確保 ②登下校の安全性確保 ③防災教育 ④防犯体制	①新校舎建築工事において、関係者と綿密な打合せを行い安全性確保を最優先に進める。 ②交通安全対策・指導を強化し、安心・安全な登下校を実現する。	B	新校舎建設工事の安全性確保及び交通安全指導は、計画的に実施し安全を確保できた。	B	引き続き安全確保に向けた取り組みが求められる。
		③防災教育と引き渡し訓練の実施 ④保護者と協力して防犯対策を強化し、安心安全な学校づくりを進める。	B	引き渡し訓練はスムーズに行えるようになってきた。いざという時のために繰り返し訓練をする必要がある。防犯対策の強化については保護者との連携していかねばならない課題である。	B	計画どおり進められている。